

短時間通所リハビリテーションの意義について

アンケートを実施し感じたこと

キーワード：短時間、小人数、個別性

武内 元（作業療法士）
小長井 舞（介護福祉士）

【はじめに】

当院は、医療機関として外来診療、訪問診療、外来リハビリテーション（リハビリテーション：以下リハ）を行う半面、介護保険分野では短時間通所リハ、通所リハ、介護予防通所リハ、訪問リハ、通所介護、訪問介護、居宅介護支援事業所など地域に根差した診療所として多岐にわたるサービスを提供している。

対象者の多様なニーズに対応するべく、平成 22 年 11 月より短時間通所リハが新設された。

今回アンケート調査を実施し、サービスの必要性を感じたため報告する。

【短時間通所リハの概要】

1 日 4 単位、1 単位 1 時間 15 分、定員 3 名で実施しており基本的には要介護者を対象としている。スタッフは OT1 名、介護福祉士兼相談員 1 名、送迎スタッフ 2 名で運用している。

1 日 4 単位と回転が多いため、送迎範囲を片道 15 分程度に設定し提供している。

【利用の流れと関わり】

来院後、水分補給、バイタルチェックを行い、その日の体調を伺いながら談話。その後、個別リハや自主トレーニングを開始。談話は、小集団の特性を活かし、状況に合わせ職員が媒介となり交流のきっかけを作っている。活動は運動以外にも趣味活動を提供し、個別性を重視した関わりを念頭に提供している。

【利用者アンケート】

平成 23 年 10 月 1 日時点で利用者している、29 名を対象にアンケート（①利用した理由、②利用後の状況を閉鎖型の質問形式にて実施し、各質問に自由記載を設けた）

を実施し回答を得た。

【アンケート結果】

①利用した理由については、「リハビリ中心」89.7%であり、リハに特化したサービスへの期待が示唆された。また、「小人数」55.2%であり、大人数での利用を敬遠する利用者の存在も多く、②利用後の状況として、「他者と話すようになった」58.6%であり、小人数での利用が円滑な交流のきっかけとなっている。

また年齢別にみると、70 歳代以上では「運動量・活動性向上(31.8%)」が「生活の充実(40.9%)」に繋がる傾向がみられたが、60 歳代以下では「運動量・活動性向上」(42.9%)、「生活の充実」(14.3%)であり、運動量・活動性だけでは生活の充実には繋がらないことを認識した。その背景として「家でやることもある」が 14.3%であり役割などが少ないことも生活の充実につながらない一要因と思われる。

【考察と課題】

小人数での個別性を重視した関わりが円滑な社会交流のきっかけに繋がったと考えられる。

60 代以下の退職後や疾病をきっかけとした社会的・家庭的役割の喪失感が QOL 低下に繋がっているとも考えられる。

それらをふまえて、今後更に個々人の生活・社会背景を重視したサービスを提供する必要がある。

多様化するニーズの中で、ニーズ優先の介護保険サービスとして短時間通所リハの必要性を感じた。